



ドクター・ハザマの

# バイタルサイン塾 10

## チーム医療介入の目的を明確化する

ファルメディコ株式会社  
大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学講座  
医師・医学博士 狭間 研至

### バイタルサインからチーム医療の介入まで その目的と意義を具体的に把握しているか？

薬剤師がバイタルサインを理解し、「薬剤師ならではの」のアセスメントをして、医師や看護師などチーム医療を行う他のメンバーにフィードバックするということが重要であるということをお話ししてきました。このことについては、ご理解をいただけたとしても、「具体的に何をするのかイメージが湧きにくい」という方も多いのではないのでしょうか？

このことは、薬剤師がチーム医療に介入することの目的は何なのか、ということに関係しますし、ともすれば薬剤師の存在意義にも関わってくる問題ですが、そこをクリアにしていく考え方についてご説明したいと思います。

### 次世代の薬剤師に求められるのは Pharmaceutical Care からの逸脱!?

薬剤師の職能拡大を考える上で、Pharmaceutical Care という概念が確立され、広く知られるようになってきました。日本薬学会の定義としては「薬剤師業務を患者の視点から見直し、薬剤師の行動哲学として体系づけようとする考え方」とされますが、薬剤師が薬物のみならず患者さんの状態に、薬学の専門家としてきちんと介入していこうという意味になろうかと思えます。

この概念は、薬剤師としての有り様を示す極めて重要なものであり、私も同じ意見です。ただ、超高齢社会を迎えたわが国の地域医療において、チーム医療のメンバーとして密接に多職種と連携しながら、患者の薬物治療に介入していくとなると、Pharmaceutical Care という概念をより広く捉え、次世代の薬剤師に

ふさわしい形へと活動や思考の場を拡張していくことも必要ではないでしょうか。

すなわち、医療人として患者さんとより密接に関わっていくための新たな職能の切り口を考えてみてはどうかと思っています。

そのようなイメージを具現化する言葉として、私が大きな衝撃を受けたのが CDTM (Collaborative Drug Therapy Management : 共同薬物治療管理) です。

### 薬剤師のバイタルサイン活用の切り口 「共同薬物治療管理」という衝撃

CDTM とは、2010年10月に薬事日報社から上梓された『チーム医療を円滑に進めるための CDTM ハンドブック』(発行・監修：日本薬剤師会、監訳：土橋朗ほか) に詳しいので是非ご一読いただきたいのですが、基本的なコンセプトとしては「医師と薬剤師が特定の患者に対して患者ケアに関する契約を結ぶ」、「この契約から生じる補助的処方権について、薬剤師が患者の薬物治療を独自に管理する」(同書監訳者序より)と定義されています。

すなわち、医師は事前にある患者について薬剤師と一定の決めごと(=プロトコールの作成と合意)をしておき、それに付随する投薬に関する指示(=薬剤の種類、投与量、投与方法、投与期間等の変更や検査のオーダー)を薬剤師の判断でお渡しするということになります。そして、その判断においては「薬剤師ならではの」理論が活かされる(=専門的知見の活用)ことが重要になってきます。

これらのバイタルサインを薬剤師が学び活用するという真の目的は、こういった活動の中にこそ見いだせるのではないかと考えています。